

フェミニズム以前のフェミニストたち

—— 1950 - 60 年代岩手女子青年たちの生活記録誌を読む

柳原 恵

I はじめに

本報告では、1950 年代から 1960 年代にかけて岩手において展開した女子青年たちの生活記録運動に着目します。生活記録運動の中で女子青年たちが刊行した文集『ばんげ』および『ささえ』の内容を分析し、70 年代のウーマンリブや 80 年代以降のフェミニズムに先駆けて生まれていたフェミニズムのありよう、言うなれば「フェミニズムがなかったころのフェミニズム、フェミニズム以前のフェミニストたち」について考えていきます。なお、生活記録誌からの引用は原文のまま掲載し、引用者による補足は〔 〕で挿入します。

II 生活記録運動と青年団活動

1 生活記録運動

まず、生活記録運動とは何か、ということですが、自分の生活や経験を自分自身の言葉で書くということによって、社会認識を深めて、自己の内面を変革していくことを志向する民間教育運動を指します。これは大正時代に始まる長い歴史を持っています。その民主的な内容から、戦時下には弾圧され、戦後、民主主義の機運のなかで復活します。類似の活動に生活綴方運動がありますが、こちらは主に、児童・生徒、子供たちが対象で、成人が対象の場合は生活記録運動と呼ぶことが多いです。

岩手県においては、無着成恭『やまびこ学校—山形県山元村中学校生徒の生活記録』（青銅社、1951）の出版を端緒とし、戦後の民主主義の潮流に乗って学校から地域の青年たちへとこの運動は急速に広がっていきます。

2 青年団活動

本報告では、特に青年団における生活記録運動の取り組みに着目します。青年団という組織は、戦前戦中にかけて、圧倒的多数を占めていた勤労青年（男子）を対象として全国的に教化していくために結成されました。その女性版として 1918 年に登場したのが処女会で、1927 年には大日本連合女子青年団として再編されました。時代の制約を色濃く受けながら組織化された処女会・女子青年団は、女子青年の目指すべき理想の姿として、都市に形成されつつあった新中間層の「良妻賢母」、さらには農村地域における「働妻健母」を掲げ、その予備軍として女子教育を娘たちに施そうとするものでした（矢口 2000）。

戦後、これら青年団も民主化され、男女青年を対象とした社会教育関連団体として新しく位

置づけられます。1951 年には、全国組織である日本青年団協議会が発足し、岩手においては岩手県青年団体協議会が設立されました。県青年団体協議会は「貧しさからの脱出」をテーマとして、男女平等の旗印のもと、青年たちは男女合同で活動していました（岩手県青年団体協議会編 1972）。

岩手県下の地域青年団の規模を見てみると、1951 から 1956 年にかけて 700 ～ 800 団体前後で推移していました（岩手県教育委員会社会教育課編 1956）。構成員の職業についてですが、1956 年の県下青年団構成員のデータを見ると、第 1 次産業に就いているものが男女ともに約 8 割を占めていることがわかります（表 1）。構成員の年代について見ると、女子の場合は 25 歳以上の団員が約 2% と非常に少なくなっています（表 2）。これは当時、多くの女性が 20 代前半までに結婚し、退団することが理由です。また、学歴区分は初等教育が 77%、中等教育（旧制中学等を含む）は 21% で、青年学級¹⁾ と同じように、上級学校への進学ができなかった勤労青年が中心であったこともわかります（同前書）。

表 1 男女別産業別団員数（1956 年）

産業形態	第 1 次	第 2 次	第 3 次	その他	計
男子	21,052 (78.4%)	2,121 (7.9%)	3,051 (11.4%)	641 (2.4%)	26,865
女子	11,871 (81.4%)	724 (5.0%)	1,359 (9.3%)	633 (4.3%)	14,587

岩手県教育委員会社会教育課編（1956）より作成

表 2 男女別年齢別団員数（1956 年）

年齢	15 ～ 19 歳	20 ～ 24 歳	25 ～ 29 歳	計
男子	10,467 (39.0%)	13,512 (50.3%)	5,604 (20.9%)	26,865
女子	8,739 (60%)	5,604 (38%)	244 (2%)	14,587

岩手県教育委員会社会教育課編（1956）より作成

3 青年団による生活記録運動の展開

岩手県は青年団（青年会）における生活記録運動が非常に活発な地域でした。各青年団でこの運動が始まったきっかけを調査した資料（川村 1962）によると、教育委員会の社会教育係が外部リーダーとして青年会に働きかけて指導していった例と、『人生手帖』や『葦』といった「人生雑誌」²⁾ に刺激を受けた青年会内部のリーダーが自主的に活動を始めていった例に大別されます。今回の報告で取り上げる『ばんげ』および『ささえ』は、後者、青年たちが自主的に始めた活動です。青年団による生活記録文集は 1940 年代後半から生まれ始めて、1950 年代半ばに発刊のピークを迎えました（吉田 1962）。

4 生活記録誌／ミニコミ／zine

ここで、今回のリレー講座「書いて配って世界を変える—zine・ミニコミ・フェミニズム」のテーマである「zine」、そして「ミニコミ」という概念と、この生活記録誌の関係を少し整理してみます。まず、「ミニコミ」という言葉の方からですが、これはマスコミ mass communication に対するミニコミュニケーション mini communication という考えから作られた和製英語です。現在では、主に 1970 年代から 1980 年代頃にかけて発行された自主制作の雑誌群を指すことが

多いです。

そして、野中モモさんのご報告「ZINE という選択肢」、村上潔さんのご報告「ジン・カルチャーの現在的展開とその意義」でも取り上げられました「zine」についてですが、私の報告では、「誰にも頼まれていないけど自分が作りたいから作る自主的な出版物」（野中 2017）という定義を採用したいと思います。野中（2017）では、日本において「zine」とは「アーティスト」だけが作るものであるかのように、非常に狭く捉えられてしまっているという問題が指摘され、「資本や権威の大きな力に頼らない、個人による情報発信を実現するメディア」としての「zine」概念に立ち返ると、さまざまな種類の自主出版を包括する大きな概念として有効活用できるのではないだろうか、提言されています。

このような指摘を踏まえ、私の報告では、「zine」という言葉をミニコミや生活記録誌を含めた、自主制作雑誌の総称として扱っていきたいと思います。戦後農村の生活記録文集を、より今日的な「zine」概念に含めることで、いわゆるファッショナブルな、都会的なイメージで想定されるような「zine」の活動と、一見すると全く異質に思える戦後岩手の農村の生活記録運動というものを、接続的に考えていくことができるのではないかと、日本の草の根のフェミニズムメディアの歴史に位置づけて考えることができるのではないかと思います。

Ⅲ 『ばんげ』一言挙げする農村女子青年

1 『ばんげ』のもとに集い、書く

ここからは、女子青年の生活記録運動と生活記録誌を具体的に取り上げていきたいと思います。まず扱うのは『ばんげ』（1956年3月第1号～1961年2月第18号）という雑誌です。この『ばんげ』は、1956年に、岩手の内陸部（和賀郡飯豊村（現 北上市））の集落で結成された成田青年会の女子会員3名で創刊されました。そのうちの一人に、現在も詩人として活躍している小原麗子（1935年生）がいます。発行期間が短い場合が多かった県内青年団の生活記録誌には珍しく、『ばんげ』は第18号まで続きました。実際の文集は散逸が進んでしまい、15号～17号のみ現存しています。現存しない号に収録された文章の一部は、アンソロジーである成田青年会・滝沢義雄編『ばんげ（総集編）』（1958）、小原麗子『稲の屍—小原麗子散文集』（1982）に再録されています。

雑誌名の「ばんげ」というのは、硬木で作った板のことで、かつて農村の集会所の軒下であって、打ち鳴らして合図に使った生活用具です。

以下に引用するのは、『ばんげ（総集編）』に収録された、「ばんげ」という詩です。

遠い日／そして／まだずっと幼い日／ばんげの鳴るのを聞いた／ことがあります。／父や母が真黒になって／働いている時／わたし達はそのばんげの鳴るのをきいて／走って集りたのしく遊んだことを思い出します。／それはいつもかわらない／いそがしい農繁／期の託児所だったのです。／あの厚い板で作った／ばんげは／今の青年会館の軒で／よく高く鳴って／わたし達を呼びました／そうです／こうして／じっと耳をすすると／わたし達の胸に／あのばんげの音が／遠く／そして近く聞こえてくるではありませんか。／そうだ

／きょうも／わたし達／ひとりひとりの胸に／ばんげが鳴る／わたし達は／そのもとえ^(ママ)／
集ってゆこう。

農村の中で仲間たちが集うということを重視するという姿勢を、この『ばんげ』という誌名が象徴していると言えるでしょう。

また、『ばんげ』が目指した姿は、小原麗子による創刊号（1956）の呼びかけ文からもかいま見ることができます。

書くことなんてエンピチをけづることなんて学校という場所にいた時だけの義務のように、中学卒業すると共に忘れていたように思うのです。けれども書くということには、たくさんいいことがあったように思います。

書くということによって自分の思っていることがはっきりしてくるかもしれないのです。
〔略〕

私達は人にいえない悲しみや悩みをここに書き合い語り合ってゆこうではありませんか。
〔略〕

いくつかの同人誌や、機関誌を見る、みんな立派なことを書いていて一流の詩人であり文筆家でもあるかのような感じがします。がそれには少しも親しみわ持てないばかりか、一つの反感さへ抱くことがあります。人に嘲笑されたっていい、私達は特定の人ばかりでなく、みんな自分の言葉で自分の文字で精いっぱい書いてゆこうではありませんか。

書く。そこには問題の端緒が提起されてくるでしょう。〔後略〕

この号の「あとがき」には、集落の貧しい農民たちの心に「深く隠されている」「悩み」を「書いて発表し、問題としてつかんでゆく必要があるのだと思います。〔略〕ほんとうのことを喋る場所、そしてそれを育ててゆく場所それがこのばんげです」（小原麗子 1956「あとがき」『ばんげ』第1号、小原 1962 所収）と記されています。

Ⅱ2 で見たように、青年団活動の主体は中学を卒業後、すぐに働き始めた勤労青年たちでした。岩手県は全国的に見て高校進学率が低い地域でした。当時の全国高校進学率を見てみると、1951 年は 45.6%、1955 年では 55.4% でしたが、岩手県の高校進学率はそれぞれ 37.2%、40.5% です。成田青年会の小原麗子が中学を卒業した 1951（昭和 26）年の北上市における進学率は 51.4% で、全国平均と比較して高いのですが、これは和賀郡の中心市街地である旧黒沢尻地区が平均値を押し上げているからで、成田青年会のあった飯豊に限ってみると男性で 13.3%、女性ではわずか 8% です。この地域の基幹産業は農業でした。中学卒業後、すぐに農業の仕事に入る勤労青年たちの自己教育運動として、生活記録が盛んになる背景があったわけです。

2 農家の女性の二重労働を問う

『ばんげ』には、会員たちの生活記録のほか、詩や短歌、私信、時事問題の論評などが掲載されていました。女子会員たちが成田集落の未婚女性 23 名を対象に生活実態を調査した記録である小原麗子「娘の一日の生活時間」（『ささえ』1961 年号、『稲の屍』再録）によると、成田青年

会の女子会員は12名、年齢は10代後半がほとんどで、過半数が家業の農業を手伝い、畑や田での仕事のほか、収穫した野菜を売るために市場へ出かけたりもしていたようです。工員や団体職員として働く者もありました。

『ばんげ』では、編集長や代表者は置かず、会員たちが代わる代わる文集を作っていました。昼間は皆仕事があるので、仕事が終わった夜に集落の小学校に集まって、ガリ版を職員室で借りて、こつこつと時間をかけて冊子を刷り上げました。会員たちは皆同じ集落に住んでいて、顔見知り同士です。「かつちゃん」、「エミちゃん」と愛称で呼び合うような仲でした。

成田青年会の特色として挙げられるのが、女子会員が多かったということです。『ばんげ』の寄稿者も女子会員が多いようです。現存している15号では寄稿者16名中11名、16号では同16名中10名、17号は同13名中8名が女性、『ばんげ（総集編）』（1958）掲載の26編の作品中19編が女性の文章です。ここから、『ばんげ』は当地の女子青年たちの主張の場としても一定程度機能していたということが言えるでしょう。

農村のなかで生活する成田青年会の女子会員たちが「いつも話題にしたことは、農村における女性のあり方ということ」（小原澄子「さっさとかたづけただけが娘達の幸せでなかったように思う」刊行年不明『ばんげ』第10号、『ばんげ（総集編）』再録）でした。『ばんげ』の女子青年たちは、民主化後も色濃く残る農村の「家」の問題、農村女性の重労働等をテーマにした文章を書きました。その一例が、伊藤静江が書いた「主婦と洗濯」（『ばんげ』第8号、1957）という文章です。以下、全文を引用します。

暑い夏がやってきた、一日着ればもう汗でとりかえなければならないようだ。

このよごれた衣類を一体誰が洗濯するのだろうか。当然女の仕事だときまっているようだ、然し小物や下着類だったら自分の物を自分で洗濯できないものだろうか？

何から何まで主婦の手にわたさなくともよいと思う。私なんか自分一人の洗濯だけでも精一杯なのに主婦達は夫又は小供と山ほど洗濯物がある。男達はこの洗濯物をどう考えているだろうか？一つの仕事と考えているだろうか、仕事の中に入っていないと思っているように見受けられる。仕事と考えられていないこの大きな仕事をいつするだろうか、朝早くから夜おそくまで働いていつ洗濯などするひまがあるだろうか、ひまといえば昼休みぐらいなものだ、精一杯働いてきてつかれている体を昼休みはぐっすり休みたいだろう。

だが洗濯ものがたくさんある男達はぐうぐういびきを立てねむっているのに、主婦達はひたいに汗をにじませながら一生懸命洗濯をしている。ようやく洗濯をすませて、ちょっと横になればもう昼休みも終りだ、男達は大きなあくびをしながら起きて来る、つかれた体で午後の仕事にとりかかる。

夜、入浴をすますともうよほどの時間だ、主婦とすればすぐにも床に入りたいだろう。が、洗濯ものの仕末、そしてつくろいといった仕事为主婦の手を待っているのである。

朝、仕事に出かける前など洗濯をすると、早く田畑に行け、洗濯ばかりしてなどとすぐがみがみいう。そのくせいつもきれいなものばかりきたがる。

このような状態でいったら最後は体を悪くする原因になると思う。

都会の主婦達は台所と洗濯で一日をすごしてしまうという。それなのに農村の仕事とい

えば野良に出て働くことが仕事として考えている。この様な事が農村へ嫁に行きたくないという原因にもなるのではなかろうか。

今学校で家庭科の教材として洗濯等をしているようですが、とてもよい事だと思う。

この文章のなかでは、農家の女性は農作業と家事労働という二重の労働負担を背負っていることが指摘されています。そして、女性にのみ割り当てられている「洗濯」という家事労働が、「仕事と考えられていない」ことの不当さが告発されています。さらに、性役割分業の是正も提言されていますね。そして都市部と農村部の、一口に「主婦」と呼ばれる女性たちの「仕事」の差異についても言及されています。実はこれらの論点は、1980年代以降、ジェンダーと労働の問題として女性学やジェンダー研究のなかで理論化されていく論点ですが、1950年代において既に、岩手の農村の女性青年によって、鋭く同種の指摘がなされていたという点でも非常に興味深い文章であると言えます。

IV『ささえ』—新しい女性の生き方を求めて

1 シスターフッドの場を創る

次に取り上げるのが『ささえ』（1959年第1号～1964年第9号）という文集です。岩手県各地の青年団でリーダー格として活躍している女子青年たちが集まって、「岩手女子青年グループ」を結成し、女性だけで生活記録文集を創刊します。それが『ささえ』です。

この『ささえ』という誌名は、青年団の男性に、「『ハハーン、ささえでもらいでえだナ』（男に支えてもらいたいんだな）とひやかされ」（小原麗子1960「あとがき」『ささえ』第3号）ていたようです。しかし、この誌名に選ばれた「ささえ」という言葉は、創刊号の「仲間の／強く生きる姿に／ささえられて／わたしも／一人の／ささえ手に／なろうと思う。」という詩に表れているように、各地域で活動する女子青年たちが互いの活動の「ささえ手」になれるよう、女同士の緩やかなつながりの結節点を作ろうという思いが込められたものでした。女子青年同士がエンパワーメントし合える、シスターフッドを求めて創られたということもできるでしょう。

『ささえ』の寄稿者の活動地域は、岩手県全域に渡り、石川県等、県外の出稼ぎ先から寄稿する女子青年たちもいました。

2 ジェンダー規範への抵抗実践

もともと、『ささえ』は青年団の女子リーダーたちが集まって創刊されましたので、『ばんげ』に比べると青年団活動についての話題が多いという特徴があります。また、職場や生活のなかで直面した性差別についての文章のほか、青年団活動で学んだ知見や、男女平等や民主主義といった戦後社会の新しい理念を踏まえて、これから女性としてどうやって生きていくかという点についても盛んに議論されました。

新しい女性の生き方を実践する女子青年の姿もありました。照井広子の「仕事と女性」（『ささえ』第3号、1960）という文章を見てみましょう。村役場の臨時職員として働いていた照井

広子は、女性が職場で「腰掛」だと言われることに反発して、そうした人の分まで働こうと仕事に打ち込むのですが、仕事に打ち込めば打ち込むほど「女としては不完全である」と職場で中傷されます。彼女には結婚を前提に交際していた男性がいましたが、仕事と家庭生活の両立という壁に突き当たります。以下、「仕事と女性」から一部を引用します。

彼と結婚を目的として交際をして行こうと話し合っ文通をしたり話し合ったりしてからちょうど一年になった。〔略〕

しかし、いま 私達は婚約するか、破棄するか^(ママ)の段になって改めて話し合い、ずっと唯の友人としてつき合う事にした。何故なら、私は職業を持っているからである。〔略〕私は職場に於いて〔略〕時には立派な男だ、とも云われる。つまり全然女らしい処が無いと云う訳なのだ。しかしこのことについては常に反論している。〔略〕女性は職場に在っては、職業人としての^(ママ)勉めを果たし、家庭に帰っては、主婦としての役目を果たし得なくては、立派な女性とは云い得ないのだ。

私が結婚を断念した原因は、其処にある。私は彼に「自分は両面を使い分ける自身^(ママ)がないから結婚は致しません」とはっきり云った。

照井は、職業生活と家庭生活の両立が困難であるなら結婚をしない、という選択をします。照井がぶつかった壁とは性役割分業に起因する問題です。女性は本来的には家庭に専念すべきであり、職業生活を送るのであれば家庭生活と両立させてこそ「立派な女性」として評価される、女性にのみ仕事と家庭の両立が課せられるという、今日にも通じる問題点が描かれています。そこで照井は結婚を断念するという選択するわけで、これは女性の居場所は家庭であるという規範への抵抗実践です。非常に強い意思と行動力を持った女性であることが伝わる文章です。

『ささえ』に掲載された生活記録から読み取れるのは、『女は無力なもの』『嫁は一個の労働力にすぎない』と考えられたのは一昔前、今は女子青年は自分の考えを持ち、人前で意見を述べ、自分で行動し、自らの力で農村を改革しようという意欲に燃えて居る」（小林末子 1959「女子青年と青年団活動」『ささえ』第1号）、若い女性たちの姿、希望や理念、行動です。

このような進歩的な女子青年たちは、周囲の大人にはあまりよく思われていなかったようです。青年団活動に参加するために外出をするという^(ママ)ことで、「よく出歩く娘」という風評が流されたり、「しゃべる女」というレッテルが張られ（同前）たりしました。女性は自己主張しないで控え目であるべきである、女性蔑視だと批判された、東京五輪・パラリンピック大会組織委員会会長の表現を使えば、女性は「わきまえて」いるべきであると、そのような女性ジェンダー規範がありますから、女性が家の外で活動する、自分の考えをしっかりとって自己主張をするというのは非常に否定的な評価を受けます。

母親世代の女性たちもこのようなジェンダー規範を内面化していますから、青年団活動に邁進する娘に対して、「いがねんだ〔行くのはやめておきなさい〕、あんまり歩くと、嫁ッコに貰い手が無くなるばかりなんだ。〔略〕そんな暇があったら少し女らしく裁縫してねすか〔していたらどうですか〕」（藤沢ミヤ 1960「母親よ、娘を信頼して」『ささえ』第3号）と心配して苦言を呈するわけです。

しかし、そういった周囲の大人の視線をものともせず、言うなれば「わきまえず」に、女子青年たちは北上市六原青年の家で泊りがけの研修会（1960年6月25～27日）を実施して「嫁」の立場の問題などを話し合うなど、活発に活動を行っていました。なぜなら、上級の学校に進学できなかった彼女たちにとっては、青年団活動は唯一の「修養場所」（小原千恵子 1960「ある日の生活日記その一」『ささえ』第3号）、「一つの解放の場」（藤沢ミヤ 1960「無題」『ささえ』第3号）だったからなんですね。集うこと、出かけること、発言し、書いて自己主張すること、それ自体も女子青年達の抵抗実践であったと言えるでしょう。

V「フェミニズム」がなかったころのフェミニズム

ここまで見てきたような女子青年たちの活動や姿は、どのような意味で「フェミニズムがなかった頃のフェミニズム、フェミニストたち」であると言えるのかについて考えていきたいと思います。生活記録には非常に多くの新しい農村女性の姿が描かれています。以下に引用するのは、成田青年会の『ばんげ』で活躍した小原麗子が書いた、成田集落の盆踊りについての文章です。集落の盆踊りの日、「昔から村長さんをやった大家」の「お嬢さん」は、かつては「おタイコに結んだ帯でひっそりしてい」た。「けれども今何代目かのそこの娘は、どうどうたる体格で村の盆おどりの即席の舞台で、いわば並いる村の衆を前に、民謡をうたいだした」。「のど自慢は若い青年が歌っても、若い娘は皆無に等しいもの」だったのに、「おどろくじゃありませんか—。成田の歴史（？）始まって以来革命（？）とばかり、つぎからつぎえと若い女子青年、はては女子高生と、歌い歌って、大人達は、まったくおどろきたまげ、ついに聞きほれるという段になってしまった」（小原麗子 1962「編集後記」『ささえ』7号）ののだと言います。

この人前で民謡を歌い上げる「お嬢さん」、「女子青年」、「女子高生」のように、戦後岩手の農村には、これまでの女性像やジェンダー規範から逸脱するような、「わきまえない」若い女性たちの姿がありました。

1950年代から1960年代当時は、「フェミニズム」という言葉は日本に入ってきていません。しかし、生活記録文書を今日のいわゆるフェミニズムの視点から読み直してみると、当時の岩手に実態としてのフェミニズムはなかったというわけではない、ということがわかるのではないかと思います。つまり、性役割分業への異議申立てや、ジェンダー規範を乗り越えて、自分の人生を主体的に、自律的に生きたいという意味、あるいは生き方そのものが、今日の言葉で言うフェミニズムと非常に親和的であり、彼女たちの姿は、フェミニズム以前のフェミニストたちであるとも考えることも妥当ではないかと思います。

先ほどの村の盆踊りの日の文章を、小原麗子はこのようにまとめています。

村の中に育つ十代の娘達には、もうわたしらにさえ想像のつかないものが生れかけているのかもしれません。枯すなそのエネルギー。村の母達のしんだ女の一生を繰り返すなエネルギー。そうした芽は、今年の子青年の研修会にも出はじめていたのでした。生活記録、読書活動分科会には、自分達の生活を資材にした小説や、脚本を書く女子青年も集って来ているのでした。農村婦人が書くことによって、自分達の姿を叩きこわしてゆくように、

農村の女子青年という一般的な、イメージが壊れてゆくであろうほど、バライティーにとんだ女子青年がふえて来るであろうことの、一つの現れでもあったのです。その一つ、一つのキバを眠らせるものがあるとするなら、そのことの為に運動は展開しなければならないのでした。眠るなそのエネルギー、その一人一人の個性、眠るな—（小原麗子 1962『編集後記』『ささえ』第7号）。

非常に感動的な文章ではないでしょうか。一人一人が「個性」と「エネルギー」を持つ娘たちというのは、「キバ」を持ったキカナいおなごです。キカナいというのは気の強いというような方言です。そのキカナいおなごというのは、かつての女性たちのありよう、「女だから」といって教育も受けられず、子を産む労働力として婚家に尽くす、「角の無い牛と云う有り難くない別名を頂戴している嫁達」（照井広子 1959「活動えの歩みだし」『ささえ』第1号）、つまり「村の母達のしんだ女の一生」とは対極にある、新しい姿です。

戦後民主主義の機運の中で萌え出た娘たちの「キバ」と「エネルギー」を眠らせずに、歌って、しゃべって、書いて、自己表現して、そのような形で新しい生き方を模索する。農村の女性像を自分の生きざまをもって変革する。そのようなことが農村女子青年のフェミニズムであったと言えるでしょう。

しかしながら、農村において女性が書き続けるということは非常に困難でした。1960年、『ささえ』の編集のために県青協の事務所に集った女子青年のひとりには、このように漏らします。

「俺此頃自分に自信がなくなったのス、姉〔は〕開拓〔集落〕に嫁いでいるっても、今迄〔青年団で〕やってきたことと、姉のくらしと何んの結びつきもない、ニセものだった様な気がして」（高橋愛子 1960「あとがき」『ささえ』第3号）

「俺」というのは「私」という意味で、岩手では女性も使います。この女子青年のお姉さんは開拓集落に嫁いだけけれども、青年団で今まで自分がやってきたことが、姉という身近な女性の、「嫁」としての暮らしざまを見ると、ニセものだった様な気がしていると。つまり、青年団活動で学んだ民主主義や男女平等という理念、理想としてきた新しい女性としての生き方というのが、実際の「村の女」としての生活の中では机上の空論と化してしまうのではないか、という懸念ですね。

実際、結婚後も書き続けるというのは、非常に困難な状況であったようです。成田青年会の『ばんげ』で活動した小原ツカ子という女性は、隣村の農家に嫁ぎました。その後に、あるインタビューでこのように答えています。

ンだンス。以前の仲間は、今どうしてるんだべって、時々ふっと思うンス。子どもは二人いるし、毎日毎日が子どものことと仕事（農業）で夢中で暮らしてるエンス、あ、こんなことを『ばんげ』の仲間だったときだレバ、書いたののって思ったりするごどあるンス。今はもうハア、ペンなんてなかなか持つごどもねえしせて、『ばんげ』で一緒だった人達と合って話してみたいなあって思うンスドモ……麗子さんや幸三さんや達彦さんや

ヒデ子さん——『ばんげ』は今はス？出てねえのスカ？そうスカ——（千田1965）。

戦後民主化の一環として、家父長制的な「家」制度が解体され、婚姻の形も夫婦単位、男女平等となりますが、男性側の「家」へ女性が「嫁」として「嫁ぐ」という、「家」制度下の結婚の規範は強く、まさにこの状況こそが、村の中で「青年団を越えて書くこと」の困難でした。女子青年たちのフェミニズム的な実践は、ある意味、「嫁」や母となる前の娘時代、女子青年時代だからこそ、なし得たものでもあったという限界をはらんでいました。

しかし、青年団を越えて書き続けた女性もいます。例えば『ばんげ』と『ささえ』の中でも活動した小原麗子は、縁談を拒否して書き続け、1980年代には農村女性が集って、話し合っ、物を書くという場として、麗ら舎読書会という読書会を結成し、現在も活動を続けています。この麗ら舎読書会の活動については、拙著『〈化外〉のフェミニズム』（ドメス出版、2018）に詳しいので、ぜひ興味のある方は参照していただければと思います。

農村のなかで女が書き続けるということは、デモやストライキ等、狭義の社会運動のように可視的ではないですし、華々しくもない、非常に地味な活動と思われるかもしれません。しかし、その地味な活動こそ、農村のなかで「キバ」を眠らせず、自己主張していくという、農村の女性像を変革するフェミニスト的な実践でもあった。その側面を見逃すことはできないと思います。

Ⅵ おわりに

ここまで見てきたように、戦後の農村においては、青年団における生活記録運動のなかで、女子青年たちが今日で言うフェミニズム的な視座を形成していました。娘が出歩く、しゃべるという行為自体が否定的に見られている中で、女子だけで集まって、語り合っ、書き合っ、そして文集を作って、同じ女子青年たちに届けるという、そういう自己表現行為そのものが農村女子青年にとっては農村のジェンダー構造への抵抗実践、つまりフェミニズムにもなっていました。

女子青年たちの生活記録文集というのは、フェミニズムやフェミニストという言葉、概念が日本になかった時代において、地域の中で生きた女性たちが自分の言葉で語る、方言で語るフェミニスト・ジンであると言えるのではないのでしょうか。

以前、私が小原麗子にインタビューしたとき、小原が語った「書いたものしか残らないんですよね」という言葉が非常に印象に残っています。生活記録運動の実践が、文字どおり「記録」されていたからこそ、今日の私たちはその歴史をかいま見ることができます。女子青年達的生活記録運動は、実はこれまで日本のフェミニズム史というのが非常に都市部中心のものでしかなかったということも明らかにします。農村の女性の活動に着目することで、都市中心的中産階級の女性を中心であったフェミニズムの歴史記述、それを再考することもできるのではないのでしょうか。

今日でも、「物言^{おなご}う女」、特に社会に対して物言う女性への風当たりは非常に強いです。このような状況のなかでは、女性が黙らないで自己表現していくということ自体がフェミニズム実

践です。それはある意味、残念なことではありますが、今日においてもそのような状況が続いています。

「物言う女^{おなご}」がしゃべるとき、例えば女性学とかジェンダー論の概念や語彙は、とても大きな武器になり得ます。しかしながら、学術の世界からでなければフェミニズムは語れないのか？という問題がありますね。そういった学術の世界ではない言葉、草の根の女^{おなご}の言葉を探したときに、東北の農村女子青年たちの言葉、つまりそういったアカデミズムの世界とは別の世界の言葉で語られた農村女子青年たちのフェミニズムが参考になるのではないかと思います。

注

- 1）戦後、勤労青少年のために市町村が開設した学級。補習教育や民主主義教育を中心とした。
- 2）無名の人々の手記、日記等の投稿原稿が掲載された雑誌群を指す。「人生雑誌」には、読者が同時に作者でもあるという特徴がある（天野 2005）。

引用参考文献

- 天野正子 2005 『「つきあい」の戦後史—サークル・ネットワークの拓く地平』 吉川弘文館
- 岩手県教育委員会社会教育課編 1956『岩手の社会教育 2 青少年教育』 岩手県教育委員会社会教育課
- 岩手県青年団体協議会編 1972『青年団 20 周年記念誌』 岩手県青年団体協議会
- 小原麗子 1962「成田を中心とする北上地区（沢内を含む）の生活記録」 岩手県教育委員会社会教育課・高橋啓吾編『青年若妻生活記録運動史』 岩手県教育委員会社会教育課
- 川村愛子 1962「和賀地方一帯の生活記録活動」 岩手県教育委員会社会教育課・高橋啓吾編『青年若妻生活記録運動史』 岩手県教育委員会社会教育課
- 千田茂光 1965「生活記録」 北上市青年団体協議会編『北上青年運動史』 北上市青年団体協議会
- 野中モモ 2017「わたしたちは日本の ZINE の黄金時代をいまだに知らない」 ばるぼら・野中モモ編著『日本の ZINE について知ってることすべて—同人誌、ミニコミ、リトルプレス 自主制作出版史 1960～2010 年代』 誠文堂新光社
- 矢口悦子 2000「地域青年集団における女性の位置と学習の展開その（1）：青年団の女性活動（女子活動）の歩みを中心に」『山協学園短期大学紀要』 38.
- 柳原恵 2018『〈化外〉のフェミニズム—岩手・麗ら舎読書会の〈おなご〉たち』 ドメス出版
- 吉田六太郎 1962「青年団体機関誌活動の推移」 岩手県教育委員会社会教育課・高橋啓吾編『青年若妻生活記録運動史』 岩手県教育委員会社会教育課

